HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	実践報告 ： 土曜教室から出発して
Author(s)	川合, 理恵
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124, 123-127
Issue Date	2016-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.124.123
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61006
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_124 (13).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

実践報告 ～土曜教室から出発して～

川　合　理　恵*

【要旨】 私は，北大土曜教室での２年間あまり学びの後，札幌市内の中学校の特別支援学級で子ども達と関わっている。土曜教室では，何らかの学びにくさや生きにくさを感じつつ成長している子ども達と時間を共にすることで，子ども達と接する際の心の在り方や，保護者の思いに寄り添う姿勢など，多くのことを学ぶことができた。中学校で教師として子ども達と関わるようになり，より多くの時間を過ごすことができるというメリットの反面，見取りや関わりが粗くなってしまうというデメリットがあると感じた。何より，「特別支援教育」が言葉としては浸透してきているものの，実際は対象と場を特定したものと捉えられがちで，子どものニーズに応じた支援をすることの難しさを感じた。私が勤務したある中学校の特別支援学級に在籍する子ども達との関わりを中心に，土曜教室とのギャップとそれを埋めるための工夫について述べる。

【キーワード】個別の教育的ニーズ，相互援助関係，自己肯定感

Ⅰ．個別の教育的ニーズ

特別支援教育の対象になる子どもに多く見られる傾向の一つとして，自己肯定感が低いことがある。本学級の生徒も同様で，自分の気持ちや考えを表現することや，苦手なことに挑戦することが苦手だった。

本学級は，札幌市の特別支援学級ではスタンダードといえる，知的障がいのある生徒を対象とした，高等養護学校・高等支援学校への進学を目指す学級だった。自然，授業のカリキュラムも，それらの高校の合格と，入学後に要求される力をつけることに重きをおいて組まれていた。

本学級を選択してくる生徒や保護者の大半は，卒業後は高等養護学校進学を希望していたため，このようなカリキュラムは妥当だろう。一方で，普通高校への進学を目指す生徒も在籍することがある。いわば特別支援学級の中でさらに個別の教育的ニーズをもつ生徒である。彼らのニーズに応える，ニーズが見えなければ一緒に探すというのは，土曜教室では言うまでもないことだったが，学校現場では特別なことだ。そのため，本人や保護者の考えをよく聞き，個別の指導計画に反映させることを大切にした。

インクルーシブの必要性が少しずつ中学校でも意識されるようになってきたが，言葉が目立つということは，浸透していないということでもある。未だ，特別な教育的ニーズをもつ子どもにとって，在籍を通常学級にするか特別支援学級にするかは大きな境目となる。特別支援学級を選択すれば，多くの教員の目に止まり，具体的な支援を受けやすくなるが，そのことで適切な進路選択が妨げられないようにした。例えば，特別支援学級に在籍しつつ普通高校を受験

* 札幌市立星置中学校　教諭
DOI：10.14943/b.edu.124.123

するために，定期テストを受けるための学習支援や環境整備と，コミュニケーションを取りやすくするためのSSTを併せて行った。

特別支援学級にいるお子さんやその保護者の多くは，多かれ少なかれ悩み，ときには苦しい思いをした末に，特別支援学級を選んでいる。乳幼児健診，就学相談，教育相談等で，「障がい」という言葉を耳にしたときの思い，その後の様々な思いは，経験してみなければわからないものかもしれない。しかし，中学校で彼らを支える教員として，特別支援学級を選んだことが，学びたいことを学ぶ壁，いわば「障害」にならないようにしたい。

Ⅱ．オーダーメイドを目指して

上述したように，進路選択や，それに向けた学び方は，生徒一人ひとりに合わせたオーダーメイドであることが望ましい。

土曜教室では，個別の指導計画も教材づくりも，子どもに関わるスタンスも，オーダーメイドが基本だった。それが，学校現場ではとても難しい。時間も人手も専門性も不足しているからだ。日々の仕事をこなしながら，学級の生徒の個別の指導計画を作成する。さらに通常学級の生徒たちの分も作成する。すべての子どもが心理検査を受けているわけではないので，個別指導計画を十分に議論することができないというのが現実だ。そのような場合は，WISC-Ⅳなどの下位検査と似た性質をもつ学習課題や日常生活の様子から，強い力や弱い力を推測し，指導に生かすようにしている。

個別指導計画や教育支援計画は，保護者や本人の解決可能な困り感を，スモールステップで解決できるような手だてを考えて作成するようにしている。特別支援学級に長く在籍している生徒の保護者は，課題が具体的に見えていることが多く，個別指導計画を作ることが比較的容易だと感じる。一方で，本人，保護者ともに漠然とした悩みや不安の渦中にあるケースの方が，個別指導計画の作成から活用までが難しいことが多い。

教材作りには一番時間をかけたいと思っているのだが，全員にオーダーメイドのものを用意することができないので，市販の教材や，興味•関心や傾向の似ている生徒に教材を使用して，セミ・オーダーメイドになるようにしている。また，重点的に理解してほしいときには，認知の傾向に合ったオーダーメイドのものを用意し，理解が進むようにしている。紙の大きさ，文字の色，一回に提示する情報量，写真をその子どもがわかりやすいように調整したり，ゲームの要素を取り入れたり，子どもが楽しみながらできる教材づくりを心がけている。また，書くことへの抵抗感が少なく済むところや，目と指先の協応の練習になるところや，すぐに反応が返ってくるなどの利点がある，タブレット端末も活用している。

学級の生徒と学習していると，自分に合った学習には意欲的に取り組むのがよくわかる。そうしているうちに，苦手で避けがちだった課題にも取り組むようになってくる。言語理解力が高く書字が苦手なAくんは，パソコンを使えるようになると，手書きよりも高度な文章を書くことができ，考えている内容の良さを周りに褒められるようになった。その後，パソコンがなくても書けるようになりたいと言うようになり，部首や意味からアプローチする漢字の学習を始めた。

Ⅲ．知的好奇心に応える授業づくり

この事例の学級では，生徒数が10人弱とそれほど多くなく，雰囲気も安定していたため，興味・関心をすくい上げて理科と社会の学習を行うことができた。「影絵をやったとき，人形をスクリーンに近づけると小さく映るのはどうして」「なぜ冬になると早く暗くなるの」「寝台列車の北斗星とカシオペアって何県に停まるの」「ヒトラーってどんな人」などの質問が寄せられ，写真やDVDを見たり，実演したりして一緒に考えた。幼児期に「なぜ」を連発する時期があるが，特別支援学級の生徒は，思考力や言語力が高まった学童期以降に，幼児期のような純朴さで質問ができるのだろうかと感じた。知識として定着した部分は少ないかも知れないが，環境へ自ら手を伸ばす知的好奇心，身近な大人に質問できる安心感，自分なりに理解できた達成感は，他の部分にも良い影響を及ぼすと思う。

理科の先生の力を借り，台風や虹を作る実験や，静電気を起こす実験，ブタの心臓やイカの解剖をしたことがあった。「楽しい」「怖い」というものから，「理科の先生はなんて実験がうまいんだ」というユニークな感動まで，思い思いに楽しんでいるのが印象的だった。楽しく，自然科学に親しむことができた。

また，給食を作って下さっている調理師の方を，特別講師として招いたことがあった。年齢の近いお兄さんだったということもあり，給食の話や調理師の仕事の話だけでなく，趣味や特技も教えてもらい，これも子どもたちがとても喜んでいた。子どもたちにとって，教師以外の職業の方のお話を聞くことは，とても興味深く，視野を広げる機会になるだろう。

その道のプロの方の話というのは，子どもたちの心をつかむようだった。同時に，特別支援学級の教員にとっても貴重な学びの場となる。時間や勤務形態など様々な制約がある中で，出前授業を当然のようにさらりとして下さった方々には大変感謝している。このことに限らず，支援仲間やネットワークを日ごろから築いていけるようにしたい。

知的水準の高い生徒は言わずもがな，発達段階にかかわらず，知的好奇心を大切にすることは，自己肯定感を高めることにつながっていくと感じている。

Ⅳ．相互援助関係の活用

土曜教室で，学生として子どもたちと関わっていたとき，子どもたちを支援する中で，たくさんのことを学ばせてもらった。教師と生徒，あるいは教師と保護者という関係性においても，教師が一方的に支援するのではなく，生徒や保護者から助けてもらうことがたくさんある。人と人との関わりなので，当然といえば当然かもしれない。

学級には，知的障がい学級と，自閉症・情緒障がい学級の二つがあるので，自閉症のある生徒，ない生徒が一緒に学習している。さらに自閉症があると一口に言っても様々で，一人ひとり個性が違うと改めて感じる。そのような一人ひとりの良さを生かし，お互いを認め合える関係づくりに努めてきた。

空間認知に長けていて，繰り返し同じ作業をすることが好きなBくんは，作業学習でミシンをかけるのがとても上手だ。日常生活場面では言葉で説明することに課題があるが，ミシンの

使い方の説明ならとてもわかりやすく友達に教えることができる。周りも，作業学習では彼はすごいと，一目おいている。人と関わるのがどちらかというと得意でなく，自分よりできない人がいることで安心感を得ていたBくんも，自信のあることで他の友だちから尊敬され，安定した自尊心を得ているようだった。

Cくんは，人と関わるのが好きで皆の人気者だが，人との距離感が近すぎたり，手をつなぐなどの，生活年齢に合わない幼い方法で接近しようとしたりすることがあった。彼が友達になりたいと思っていた他クラスの女子が転校することになり，彼は悲しそうにしていた。すると，周りを見る力があって言語理解力が高く，ちょっとやんちゃなDくんが，熱心に自然な言葉のかけ方を教えてくれた。Cくんも，教師ではなく友達からのアドバイスで，しかも生きた経験ということで，ソーシャルスキルトレーニングとは違う学習ができた。

3年生のEくんは，多動傾向が強く，数えきれないほどの失敗をしてきた。自己肯定感が非常に低く，とても優しく面倒見が良いという彼の長所がなかなか表に出てこなかった。人からどう見られているかを気にしすぎてしまい，学級内でも自分の意見を表現することができなかった。3年生になり，初めて後輩ができたことで，次第に自分の良さやユニークな考えを表現することができるようになった。誰かが挫けそうなとき，「あきらめるな」と励ます彼の言葉には重みがあった。また，得意な走ることを通して，通常学級にも何人か友達ができた。成長したEくんを，立場の異なるたくさんの人が認めてくれ，それは彼の大きな自信になったことだろう。

この年の学級の生徒はとても仲が良かった。卒業式にはクラス全員が号泣し，自閉症が苦手といわれる感情の理解や表現がそこまで育っていたことに驚いた。単純に生徒同士の相性が良かったのだろうが，お互いの良さをしっかり認め合えて注意しあえる関係性があった。3年生を皆が慕っていて，先輩は後輩を見守るという，緩やかな上下関係もあった。こうした安定した関係性の中で，自己肯定感が高まり，自分らしさを表現する安心感が生まれていったのだと思う。

特別支援学級の生徒は，支援されることが多いと思いがちだが，相互に援助し合う力があり，活用するリソースの一つになることが実感された。土曜教室でそうだったように，援助する側・される側に固定せず，生徒や保護者と関わっていくことが求められると思う。

Ⅴ．特別支援教育の実現に向けて

特別支援教育コーディネーターには専門性や，連携していくための力が必要だといわれるが，その他にも特別支援学級の教員が通常学級の生徒の指導に介入することには，いくつか難しさがあると感じる。他の業務を抱える中で，当該生徒や，保護者，担任とコンタクトをとる時間を確保することや，特別支援学級の教員という立場，あるいはコーディネーターという立場の理解が人によって異なり，支援に制約が生じるということなどだ。

限りある時間を有効に活用するために，子どもに「この人が好きだ」と思ってもらえるよう努めている。共感的理解，受容的態度など基本を忘れず，子どもの課題を見つけて励ましながら共に解決の手だてを考えたい。また，保護者や担任やスクールカウンセラー，相談支援パー

トナー等，必要に応じて外部機関との連携を大切にしている。どれもよく言われることだが，実践するのは難しく試行錯誤している。大きな一歩を望まず，小さな一歩を積み重ねていくことも前進と考えるならば，緩やかに前進しているという実感がある。子どもの小さな成長は，周りを取り巻く様々な人に，勇気を与えてくれる。

謝辞に代えて

子どもたちは，学校という場で多くの失敗体験や生きにくさを感じてきた。学校で教員にできることは，自己肯定感を回復させることと，自己を表現しようと思える安心できる環境を整えることだと思う。

北大土曜教室恒例のクリスマス会では，子どもたちは一年ごとに成長した姿をわかりやすいくらいはっきりと見せてくれていた。一年前は物陰に隠れていた子が，たくさんの人の前で自分の得意なことを表現できるようになるというのは，安心できる人達のいる場所だと思ってくれるようになったからだろう。そのときの感動を大切に，今後も子どもたちと関わっていきたい。

当時，土曜教室で学生として，どれだけのことができたかわからない。そのとき会った子どもに何か返すことはできないが，子どもたち，先生方，先輩方，仲間から学ばせてもらったこと，そして今日も学ばせ続けて頂いていることに感謝し，今目の前にいる子どもたちに少しずつ返していきたい。

引用文献

大沼直樹，瀧本一夫（2007）：特別支援教育コーディネーターの基本的姿勢と実際，明治図書

田中康雄（2007）：特別支援教育「成功のカギ」学級経営・連携・親対応－特別支援教育の中で「学級経営・親対応・連携」をどう進めるか－，児童心理2007年 8 月号， 2 -11

水崎　誠（2014）：中学校における通常学級に在籍する障害のある生徒の個別の指導計画と支援体制について，LD－研究と実践－，23(3)，238-242